



第 5 号

2007.12.8 発行

大阪府立北野高等学校図書館

からだ 身体と心の、メンテナンス。

オモテ面では「食べる。」に関する本を紹介します。

そしてウラ面では、冬の季節、暖かくしてじっくり楽しみたい本を紹介します。

* 地球の食卓 世界24か国の家族のごはん

381-M-71

ピーター・メンツェル フェイス・ダルージオ TOTOT出版

たくさんの、たくさんの、考えられへん！発見。

世界各地の家族にその家の1週間分の食料を並べてもらい、その家族とともに写真に収めたものです。

「FOODは風土」である、ということもよくわかります。

それにコカ・コーラがそれを壊していく「先鋒」であることも気づかされます。

ブータンやグリーンランドでは、コカ・コーラが豊かさの象徴？として並べられ、メキシコでは、1週間に24%のコカ・コーラを飲んでいました。

そして日本ですが、意外と……です。

31cm × 21.5cm × 2.5cm、重さ 1.4kg の大きな本です。図書館で手ににとって見るだけでも価値があると思います。

* ウンココロ・・・しあわせウンコ生活のすすめ

藤田紘一郎・寄藤文平 実業之日本社

見て見て！ぼくのウンコ！

ウンコの半分は、腸内細菌の死骸です。それは、あなたがどういう思いを持って、どういうモノを、どういう風に食べ、どんな時間を過ごしてきたかという身体からのオタヨリ。菌達は、免疫力を高め、外敵からあなたを守ってくれる心優しき戦士達です。菌達と仲良くいい関係が作れたとき、素敵なオタヨリと出会え、澄んだココロにもなれます。

- * ファストフードが世界を食いつくす エリック・シュローサー 草思社 673-S2-1
* おいしいハンバーガーのこわい話 エリック・シュローサー 草思社 498-S13-1

ほんらい、生命をいただく営みであったはず・・・。

アメリカにファーストフード産業が誕生した社会的背景、その業界の成長に伴って大きく変化した社会や消費者の食を、現役の記者である著者が徹底的な取材によって描き出す。なかでも圧巻は、処理工場での牛の解体現場のシーン。安全性という問題を越えて、生命への冒涇とも思える状況が報告されています。

『おいしいハンバーガーのこわい話』は、『ファストフードが世界を食いつくす』の“こども向け版”です。

注目！

野菜や果物だけでなく、家畜や魚でさえも大規模な機械化によって管理せざるをえない現代社会の「食」の実情を描いた、映画「いのちの食べかた」が、12/15から十三の第七芸術劇場で上映されます。見たくないけど、見たくないけど、見たい映画です。

- * 内臓感覚 脳と腸の不思議な関係 福土 審 NHKブックス

「たかが腸」、ではないと思う。

社会に生きる現代人の多くが、過敏性大腸症候群^{かびんせいだいちようしょうこうぐん}という疾患に悩まされています。この疾患の研究治療にあたる第一人者の書。臨床データや実験から、「脳と腸の間にある密接な交流」を明らかにしています。

はじめに腸ありき。腸こそ動物の最初の器官で、腸の神経が脳に似ているのではなく、腸の神経に脳が似ている。腸は自らうけた刺激を「内臓感覚」^{ナイゾー}として脳に伝え、脳は自律神経やホルモンを介して腸に影響を与える。内臓と脳と心の状態を、腸が映し出しているのだといいます。

- * 食卓の上のDNA 暮らしと遺伝子の話 中村桂子 ハヤカワ文庫 467-N6-2

それは、毎日の生活を見つめる視線。

日常とDNAの関わりを、著者が隣家のかな子さん（一児の母）の質問に答えるという形で書かれています。現代の社会は、温暖化、ゴミ問題、福祉・教育の問題・・・と問題だらけのような気がしますが、そのひとつひとつに対処していくのではなく、「人間が生きものだ」という基本に戻ると、突破口が見つかるはずと言う著者の深く熱い思い。

「あなたの中のDNA 必ずわかる遺伝子の話 中村桂子 ハヤカワ文庫 467-N6-1」とセットで読んでみてください。

* まぼろしのハワイ

よしもとばなな

幻冬舎

年を重ねたからこそ、ちりばめられた知恵。

よしもとばななさんの最新の書き下ろし小説。

フラダンサーのあざみと義理の娘のオハナは、ふたりが愛したひとりの男性（夫と父）の記憶を抱え、その男性との思い出が溢れるハワイ島に向かいます。そのハワイ島でおきた踊りの精と永遠の命をめぐる3つの物語です。

登場人物が若いせいか、ばななさんの若い頃の小説の世界と同じ雰囲気、少しばかり懐かしさがあります。

* 走ることに語るときに僕の語ること

村上春樹

文藝春秋

914-M34-1

書く村上春樹、走る村上春樹。

書くという行為は、悪とか毒をつかんで形にしていく不健康な行為。

その不健康さを保つために健康さを保たなければならない。そのために、**ランナーである著者が、ランナーとしての自分を中心に、芸術、仕事についてはじめて語った本。**

生活をする、仕事をする、その地味な行為もひとつひとつを積み上げていく中で、自分にとって何かプラスになる。積み上げていくことで何らかの誇りを得られる。

若い人が読んでも、熟年の人が読んでも様々な発見のある本です。

* おばあちゃんが、ぼけた。

村瀬孝生

理論社

081-Y1-1-25

人間の最大限の不思議と、どうしようもない魅力。たぶん。

賢くなることが、たくさんの知識を抱えることが、
素晴らしいのなら、ほめたたえられるのなら、
ぼけるって何？ だれが教えてくれる？

谷川俊太郎氏推薦の老人通所施設「宅老所よりあい」の年若き所長による、
「ぼけた」おじいちゃん、おばあちゃんと過ごす、たんたんとしたレポート。
なんとも言えない・・・というのはズルイのですが、やっぱり不思議なんです。
本の内容に、笑ってもいいのだけど、笑うまでには至れませんでした。

周囲になじめない、何を話せばいいのかわからない。

同じ日本語を使っているはずなのに、言葉が通じない気がする・・・。

そんな疎外感を子どもの頃、そして今も？ 感じることもあります。
そんな時、どうしてきましたか。どうしていますか。

『**自らを天才だと信じて疑わないひとりのむすめがありました。齊木杉子。十一才。わたしのことです。**』という文章で始まる、「氷の海のガレオン」。
十一才の杉子の選んだ道は・・・。一回目は、杉子に寄り添って読む、二回目は杉子のママの気持ちに寄り添って読む。三回目は・・・。

若さに迷い、若さにひかりを。そしてもう戻れない、夏。あの時。

田口ランディさんの書いた初めての純愛小説だそうです。

「どうして私は“私”なんだろう。私たちはいったいどこから来て、どこへ還ってゆくのだろう」といつも不思議がっている、中学3年生のまゆ。
不治の病になった初恋の岡野君と過ごす、中学生最後の夏休みのお話です。
形ある世界（生）と、形のない世界（死）を『**ひかり**』が美しくいきかいます。

動物のかたちをとったその人の魂。

両親を亡くして、オックスフォードの大学寮に暮らす明るく活発な少女**ライラ**は、ある事件をきっかけに、北極へそして異世界へと旅立ちます。不思議な力を持つ『**黄金の羅針盤**』と**ダイモン（動物のかたちをとったその人の魂）**と共に。

ポイント！

「黄金の羅針盤」の舞台になっている世界では、
人間は誰もがダイモンという分身を持っていて、ライラもパンタライモンと名付けた、
様々な動物へと姿を変えることの出来るダイモンと常に一緒に生活しています。
ただし、**ダイモンはそのパートナーである子どもが成長し、大人になると変身できなくなってしまう。**ダイモンが変身しなくなる、すなわち大人になるとはどういうことなのか・・・映画の公開が間近ですが、その前に原作を読む。物語の中で遊ぶしあわせ。